

## 第5章 4～5世紀から9～10世紀の土器編年

### 第1節 沖縄諸島貝塚時代後期の尖底土器と平底土器

—遺跡における水平分布と垂直分布—

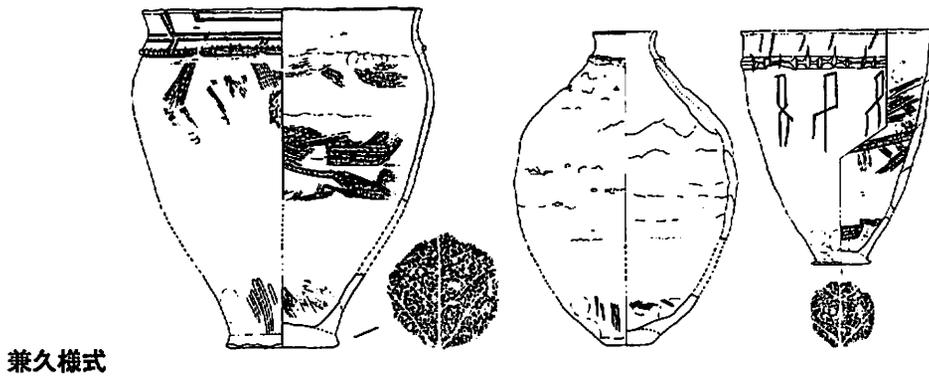
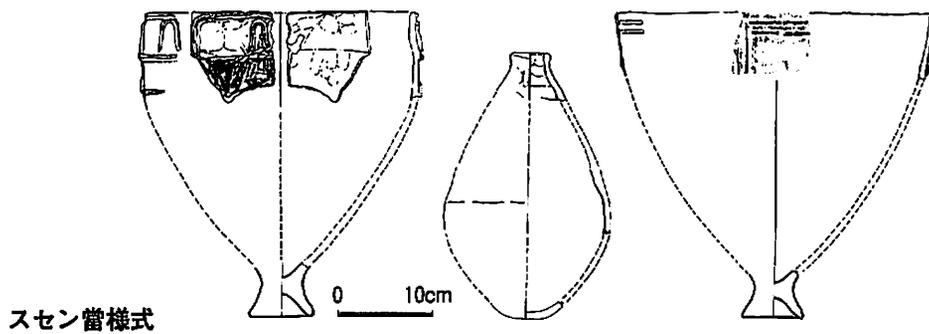
### 第2節 奄美諸島の古墳時代併行期の土器

### 第3節 兼久式土器分類試論

—奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に—

### 第4節 琉球列島出土土師器、須恵器の基礎的研究

—マツノト遺跡出土土師器の検討—





## 1. 後期土器研究略史

沖縄後期における土器については、古くから多和田眞淳（多和田1956）や高宮廣衛（高宮1961）らによって土器型式の設定がなされ、編年についても言及されてきた。その中で高宮は沖縄の新石器時代に相当する時代を「貝塚時代」と称し、前期・中期・後期の三時期に区分した。

1974年には沖縄国際大学考古学研究会によって土器の文様や底部、口縁部の形状等の特徴から形式変遷の試案が発表された（中村ほか1974）。また、その際に「浜屋原式土器（浜屋原Cタイプ）」の型式設定も行われ、現在でも評価されている。1975年には読谷村渡具知東原遺跡から曾畑式土器と爪形文土器が発見され、これまでの沖縄における土器の出現が一気に数千年も遡り、土器編年の修正が余儀なくされた。同遺跡の発掘調査を担当した高宮によって、沖縄貝塚時代前期の前に早期が設定され、現行の四時期の編年案ができあがった（高宮1978）。

1984年には糸満市真栄里貝塚の土器が九州弥生時代前期の板付式土器に類似しているということから、沖縄後期をさらに四期に細分し、Ⅰ期を弥生前期、Ⅱ期を弥生中期、Ⅲ期を弥生後期、Ⅳ期を古墳から平安時代並行期と捉えるようになった（高宮1984）。

1990年代後半から2000年代前半には、高宮暫定編年に疑問を抱いた若手研究者たちによって沖縄後期土器編年の見直しがなされ（宮城1998、新里2004）、一定の成果をあげて現在に至っている。

## 2. 研究の視点と方法論

尖底土器と平底土器の器種はいずれも深鉢形もしくは甕形が主体をなし、他に壺形・皿形・碗形などが若干認められる。これら器種の違いは機能（用途）の違いでもあり、深鉢形もしくは甕形は煮炊き用の土器として使用された公算が大きい。

これまで、尖底土器から平底土器への移行は漸次的であり、両者が併存している遺跡も存在することが唱えられてきた（木下2003）。そこに疑問を感じたわたしは、「同一集団によって、同じ機能を有する土器を2種類（器形）も製作することがあり得るのかということから、尖底土器と平底土器は時期の異なる別集団の製作物である」という仮説のもとに、次の方法で分析を試みた。

その前に、尖底土器と平底土器の底部製作の違いを整理する。

- 尖底土器—土器製作過程において、あらかじめ底の部分を作る際に粘土塊の中央部を指などで押し窪め、周りを立ち上げて製作するため、内底（見込み）に平坦面が生じない。
- 平底土器—底の部分となる粘土の円盤を先に作り、その後に粘土紐を積み上げるため、内底（見込み）に平坦面が生じる。

上記の観点から底部を観察することによって、尖底土器と平底土器を明確に区別することができ、底部の外見に惑わされることがないと考える。

## 3. 遺跡における土器底部の水平分布と垂直分布

沖縄後期の遺跡から発掘調査で得られた土器底部について、再度、遺跡に戻す作業を行う。すなわち、この作業で出土状況を入念に分析することにより、土器底部の水平分布と垂直分布を明らかにし、尖底土器と平底土器の関係を把握することが可能と考える。ただ、すべての土器資料が図面上に詳細な出土地点を記録しているわけではないので、今回は必要最小限の条件を満たしている出土地点（グ

○○遺跡 第3層

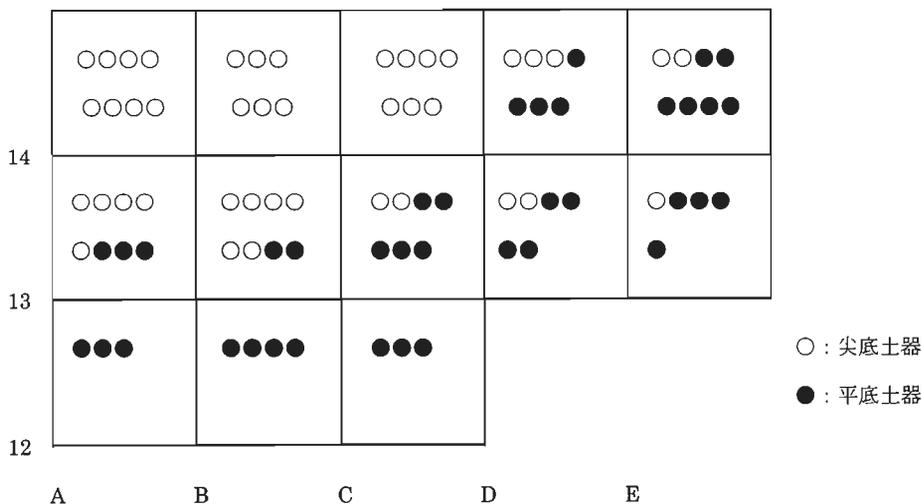


図2 遺跡における尖底土器と平底土器の水平分布凡例

リッド)と出土層位を単位として、作業を進めることにする。実際には以下の図表を作成し、出土した土器底部を各遺跡のグリッド別、層位別にドットする。

上記の図表は遺跡における尖底土器と平底土器の水平分布状況を模式化したものであり、それによって両者の関係が把握できるものとする。すなわち、図のような状況であれば、尖底土器と平底土器は共伴するものではなく、時期の異なる別の遺跡が近接しているため一部において土器の混在が認められるということになる。

ただ、遺跡ごとに検証していないことから、実際については今後の課題である。

#### 4. 奄美諸島との関わり

沖縄諸島の北東側に位置する奄美諸島は、新石器時代の古い段階から沖縄諸島と歴史的・文化的環境が類似している。また、九州地域と沖縄諸島の間にある奄美諸島は、北方からの文化伝播の中継地として重要な位置を占めている。

土器文化に関しても総体的には沖縄諸島と類似する点が多いが、各型式土器については双方とも地域的特色が顕著にみられる。奄美諸島の土器編年を体系づけたのは河口貞徳(河口1974)であり、一部修正はあるが現在でも踏襲されている。

沖縄貝塚時代後期に並行する時期の土器については、これまで多くの研究者によって編年や性格付けが行われている。なかでも「兼久式土器」に関しては中山清美(中山1983・1984)をはじめ、高梨修(高梨1999)、池田榮史(池田1999)らの論考がある。

さて、これまでの調査研究の成果から奄美諸島の土器の状況等についてみると、貝塚時代中期(縄文時代晩期並行期)には、奄美諸島で「宇宿上層式土器」、沖縄諸島では「宇佐浜式土器」と呼ばれる丸底ないし尖底の深鉢形土器が盛行し、同一の土器文化を有していた。ところが後続する貝塚時代後期前半(弥生時代並行期)には異なった土器文化になっている。沖縄諸島が前時代の伝統を受け継いで尖底の深鉢形土器が主流をなすのに対し、奄美諸島では弥生土器の影響を受けて生じた平底の甕形土器が主体をなし、尖底土器は姿を消してしまう。そのことが単に地域性としてだけで捉えることができるのか、今後の土器研究に俟たれるところである。

沖縄諸島では古墳時代まで尖底土器が残り、6～7世紀頃に奄美諸島の「兼久式土器」の影響の下、「アカジャンガー式土器」と呼ばれる平底の甕形土器が生じ、「フェンサ下層式土器」を経て12世紀前葉のグスク時代前夜まで続いていくことがうかがえる。

## おわりに

以上、沖縄貝塚時代後期の尖底土器と平底土器の関わりについて述べたが、今回は問題提起に留め、今後の課題として各遺跡の出土状況等进行分析して結論を導き出す予定である。

末尾ながら今回の報告の機会を与えてくださった熊本大学の木下尚子教授には感謝の意を表する次第である。

## (参考文献)

- 池田榮史 1999「沖縄貝塚時代後期土器の編年とその年代的位置付け—奄美兼久式土器との関わりをめぐって—」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学』名瀬市教育委員会
- 河口貞徳 1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号 鹿児島県考古学会
- 岸本義彦、西銘章、宮城弘樹、安座間充 2000「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化』（上巻）高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 木下尚子 2003「6～7世紀の奄美と沖縄」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』改訂版、熊本大学文学部
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号 人類史研究会  
2004「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』第12巻 貝塚後期文化 小学館
- 高梨 修 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学』名瀬市教育委員会
- 高宮廣衛 1961「沖縄本島の先史文化<概観>」『沖縄文化』第4号 沖縄文化協会  
1978「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」『南島考古』第6号 沖縄考古学会  
1984「暫定編年（沖縄諸島）の第3次修正」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学部』第12巻第1号 沖縄国際大学文学部  
1992「沖縄先史土器文化の時代名称—<縄文時代・うるま時代>の提唱について」『南島考古』第12号 沖縄考古学会
- 多和田真淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『沖縄文化財調査報告』1956年版 琉球政府文化財保護委員会
- 中村愿ほか 1974「分科会 土器」『第3回大学祭 資料』沖縄国際大学考古学研究会
- 中山清美 1983「兼久式土器（Ⅰ）」『南島考古』第8号 沖縄考古学会  
1984「兼久式土器（Ⅱ）」『南島考古』第9号 沖縄考古学会
- 宮城弘樹 1998「貝塚時代後期の研究（Ⅰ）—一部瀬名貝塚出土表裏面有文土器資料に着目して—」『あじま』第8号、名護市立博物館